

R.S. トマスのロマン派的精神

佐野 博美

The Romantic Spirit of R.S. Thomas

Hiromi Sano

—概要—

本論は以前、「緑の聖域—R.S. トマスのウェールズ—」のタイトルで発表したもののテーマを、さらに発展させたものである。自己の存在の原点、アイデンティティの拠り所を追及する R.S. トマスの姿勢に、19世紀ロマン派詩人たちにも共通する精神を探る。

目 次

I . *hiraeth*—回帰する人生—

(1) *hiraeth*

(2) 記憶の中のウェールズ

(3) 失われた言語

(4) 神の不在

II . 自然に宿る神

III . 想像力の機能

(1) Abercuawg—言葉の力—

(2) 詩人の本務

IV . 結論—R.S. トマスのロマン派的精神

I . *hiraeth* — 回帰する人生 —

For some there is no future but the one that is safeguarded by a return to the past.

(R.S. Thomas, *The Echoes Return Slow*, 66.)

(1) *hiraeth*

詩人は常に、存在の原点、自己の回帰すべき場所を探し求める。これについては、以前の拙論、「緑の聖域—R.S. トマスのウェールズ—」(*Wisteria*, No.4, 京都女子大学大学院英文学会, 1998.) の中でも述べた。ウェールズの現代詩人、R.S. Thomas (1913~2000) の人生の経緯は、一度は離れた生まれ故郷への方向性を持つことで、地理的にも目に見える形でこのことを示している。トマスは生涯、「ウェールズ」にこだわり続けた。現代という俗物的な時間の中に埋もれてしまった<理想世界>の記憶、彼の心の「ウェールズ」、「the real Wales of my imagination」("Y Llwybrau Gynt 2 [The Paths Gone By]", 138.) を再び掘り起こし、この世界に回復することに、彼の生涯は費やされた。なぜなら、神秘とも言えるその領域こそ、彼が唯一アイデンティティを覚える場所、彼の存在の原点であったからだ。こうした行為を促す彼自身の心の衝動を、トマスはウェールズ語で *hiraeth* (郷愁) と呼んでいる。そしてこの *hiraeth* を宥めるべく、彼の心が承認する「本当のウェールズ」の在りかを求めて、彼は現実に生活の場を移していった。おそらく心の次元にしか存在し得ないであろう世界を現実世界に探し求めるのは、ロマンティックな心情だ。しかし彼は、ありがちな放浪の人生を送ったわけではなかった。夢に生きるこの詩人は、一方では堅実な生活者でもあったからだ。英国国教会の聖職にあり、夫として父として家庭を持つ彼は、誠実に職務を果たしながらも、粘り強く夢を捨てなかった。

ところでトマスは、「私」という自身の存在を、複数のレベルで捉えていたと思われる。すなわち、この「私」とは、第一に実存者としてこの人生を生きる者であり、第二に遠い祖先から流れつづける血に息づく記憶であり、第三に神の側を離れてこの世に旅立った一個の魂でもある。したがって自身をどのレベルで考えるかで、その存在の原点も在り様が異なる。自分が生まれ育ったこの地上の故郷に自己の存在の原点を感じる時があれば、心でしか測り得ない不可思議の領域にそれを覚える時もある。トマスの場合、

彼の全存在に回帰を促す「本当のウェールズ」、彼の心のウェールズを指し示す針の方位は、同時に自身が育った海辺の故郷、Anglesey（その先端に Holyhead がある）を向いていた。だからと言って、彼の言う hiraeth を単なるホームシックで片付けることは出来ない。これについては後に考察する。ともかくも彼の人生の地理的軌跡は、アイリッシュ海のほとりに位置する故郷、Caergybi (Holyhead) を起点に大きく円を描いて、眼前に故郷を望む Llyn 半島にたどり着くまで、ひたすら出発点、Caergybi の方角に回帰していく。それはまさに、目に見える形での「回帰する人生」であったのだ。

ところで、トマスには自伝および自伝的作品がいくつかある。その中でも以下の4編からは、彼の人生が描いた実際の地理的経緯及びその動機としての心の経緯の詳細をうかがい知ることが出来る。

1. 'Y Llwybrau Gynt 2 [The Paths Gone By]': *R.S. Thomas Selected Prose* (edited by Sandra Anstey, Poetry Wales Press, Mid Glamorgan, 1986.) 収録の1篇。下記の3に示した *Autobiographies* にも 'Former Paths' のタイトルで収録されている。1972年、ウェールズ語で出版されたトマスの自伝的ラジオ・トークを英語に翻訳したもの。
2. 'Autobiographical Essay': *Miraculous Simplicity* (The University of Arkansas Press, Fayetteville, 1993.) の冒頭に収録。
3. 'No-One'(Neb): 1997年、他の3篇と共に *Autobiographies* (J.M. Dent, London) のタイトルのもとに、ウェールズ語版 (Neb) から英語に翻訳、出版されたもの。自伝として最も詳しい。
4. *The Echoes Return Slow*: 1988年、Macmillan, London。(1989年、paperback版) 全121頁。自身の誕生から老年に至る間の時々々の心模様を、全頁見開きで、それぞれ左頁に散文、右頁に詩1篇（共にトマス自身の自作）を対照的に配置した実験的で興味深い編集。

こうした自伝のいずれを読んでも、失われた故郷への回帰がトマスの人生の主要テーマであったことがわかる。(ただし先にも述べたように、「故郷」には重層的な意味がある)。その象徴的表現として、'No-One' には、楽しい少年時代を過ごした故郷への hiraeth の

文字がいたるところちりばめられている。以下、その例をあげてみよう。

* この書においてトマスは、自分自身を 'I' とは呼ばず、第三者的に 'he' あるいは 'R.S.' と呼んでいる。

* *hiraeth* という言葉は、'No-One' の本文中、すべてイタリクス体 *hiraeth* の形で綴られている。

1. [In Chirk] the young man realised with a terrible suddenness where he was. It was in this way that the *hiraeth* for Anglesey and the sea began, a *hiraeth* that would influence him throughout the years to come. ('No-One', 43.)
2. Many bombs were dropped in the area that night, and the hill-country in the vicinity of Minera was set in fire. On seeing the flames, they started to drop bombs there as well, and a shepherd who lived at the edge of the moorland got the fright of his life. So hateful was it to the curate to think of the destruction occurring almost every night, and such was his *hiraeth* for the hills in the distance (Moel Fama could be seen quite clearly to the north-west), that he decided to learn Welsh as a means of enabling him to return to the true Wales. (ibid., 50.)
3. At other times, as he wandered on the moorland on the other side of Cefn Coch, he would perhaps meet a shepherd who would say to him, 'You can almost smell the sea today.' All this was enough to prod the old *hiraeth* that was always simmering within him. (ibid., 62.)
4. For some people, life is a matter of looking back, and although that is not natural in a young man, it was R.S.'s tendency because of his *hiraeth*. He had lived at home long enough, and it was nice to be able to leave Holyhead and start a new life. But even in the college in Llandaff, and more so again in Chirk, he began to remember the sea and the whole atmosphere of Anglesey. Even in Chirk he was

within reach of the hills and Welsh areas; but after marrying and having to move from there to Maelor Saesneg, he longed not only for the sea but also for the hill-country, so tediously flat was the dairy land around him. Being appointed rector of Manafon did something to allay that *hiraeth* by bringing him back to the hills. (ibid. , 73.)

5. By reaching Aberdaron he got rid of the old *hiraeth* for the sea and the west. What possessed him now occasionally was the *hiraeth* of time; the memories of his youth on Anglesey. (ibid. 88.)

海辺の故郷に抱くノスタルジー。人は故郷を遠く旅立っても、人生の黄昏には再び故郷に帰ることを切望する。トマスは自身の人生を始めるために故郷を出立した時から、すでに自分の行動の間違いに気付いていた。しかし(人生とはそういうもので)故郷に焦がれながらも、大きく迂回した道のりを歩き続けなければならなかった。それが彼の運命であったのだ。「青い鳥」にも象徴されるように、人生の究極の目的が、結局はその出発点に求められるものであることを知るのは、何と逆説的な神秘であることか。

(2) 記憶の中のウェールズ

1936年、23才のとき、トマスはイングランドとの境界に位置する Chirk に、副牧師として赴任した。こうして、聖職者としての生活が始まる。それ以来、Hanmer (Maelor Saesneg) – Manafon (in Montgomeryshire) – Eglwysfach (near Aberystwyth) と任地を変えて、1967年、54才の時、晴れた日には真北の方角に故郷 Holyhead を望むシーン半島 (the Llyn Peninsula) の Aberdaron にたどり着いた。ここから Anglesey あるいは Holyhead までは、彼の車でほんの2時間ばかりの距離だ。この時すでに、彼は妻 (画家 Mildred E. Eldridge) と22才になる息子 (Gwydion) を持つ家庭人であり、Manafon では教区牧師 (rector) の地位を得て、聖職者としても着々と職務を果たしていた。

こうして長い時間の後、ようやく故郷の海にたどり着くことで、トマスの夢は満たされたのか。その場所に、彼の「本当のウェールズ」は存在したのか。'No-One' には次ぎのような記述がある。

By reaching Aberdaron he got rid of the old *hiraeth* for the sea and the west. What possessed him now occasionally was the *hiraeth* of time; the memories of his youth on Anglesey. But he knew that yielding to that was completely futile. Youth was much further away than Anglesey. Reaching the latter was only a matter of two hours in his car, even if it had changed out of all recognition. But there was no way of reaching the past except through the imagination, as he realised. ('No-One', 88.)

確かに、故郷の海に対する渴望からは解放された。しかし、その地は最早、彼が長年思い描いてきた場所ではなかった。時が全てを変えたことを、彼は思い知らされる。少年トマスを育んだ渴望の地は、時の彼方に再び遠のいてしまった。追憶の道をたどるより他、本当の故郷へ帰る術はもうない。*The Echoes Return Slow* (以下、ERS と略記)には、同様のことが、以下のように詩の形で述べられている。

Years are miles to be
travelled in memory
only. The children have vanished.

Here is what they saw

over the water: a beetling

headland under a smooth

sky with myself absent.

How shallow the minds

they played by! Not like mine

now, this dark pool I

lean over on that same

headland, knowing it wrinkled

by time's wind, putting my hand

down, groping with bleeding
fingers for truths too
frightening to be brought up.

(ERS, 71.)

歳月は追憶の中でしか
たどれない道程(みち)だ
あの頃の子どもたちはもういない
私が立つこの場所は

あの頃彼らが見たもの
暖かな空の下、海に突き出ていた
未知の岬
何と気楽な心の浅瀬で

子どもたちは遊んでいたことか
私は今、同じ岬の
この暗い淵を覗き込み
「時」という風に

それが波立ち歪むのを見る
そしてその水に手を入れて
引き上げるには余りに怖い真実を
傷つき血を流す指先で探るのだ

夢にまで見た地。しかし夢はあくまでも夢に過ぎないのか。失われた「時」を、もはや遡ることは許されないのか。想像力が呼び覚まし、記憶という心の倉庫で今も生き続ける世界。それは所詮、過ぎ去った幻なのか。悲痛な思いで、詩人は心の淵に真実をまさぐる。

(3) 失われた言語

ウェールズ人は元来、イングランド人が英語(English)を持つように、民族独自の言語として、ウェールズ語(Welsh)を持っていた。言語とは、他の言語と置き換え可能の、ただの道具や記号ではない。その証拠に、ひとつの言語を他の言語に翻訳することは、容易な作業ではない。問題は、表層の語彙や構造の違いだけではない。言語の深層には民族の心がある。独自の精神、思想、感情、文化、歴史等が相俟って、ひとつの言語の深層を形成している。しかし、それだけではない。同様のことが、その言語を母語とする個人のレベルでも言える。すなわち、上記の民族性に個人的特性が加えられる。言語は、個々の感性、経験、記憶と深く結びついている。言語とは、それを所有する人間そのものだ。それ自体が生命と個性を持っている。それ故、詩という芸術が可能になるのだ。言語とは実に不思議なものだ。言語は民族のプライドであり、それを所有する民族の肉体にも等しい。しかし言語は常に、この地上における力関係の脅威にも晒されている。強い言語が弱い言語を駆逐、あるいは支配する現象は、歴史の始めから一般的に目撃されてきた。それは必ずしも戦争や侵略の結果とは限らない。現在の世界で英語が占める地位を見れば、このことは一目瞭然だろう。

ウェールズの歴史は、ウェールズ語にとって苦難と屈辱の歴史でもあった。ブリテン島においてイングランドが支配権を握って以来、ウェールズ語は常に消滅の危機に晒されてきた。しかし、一民族がその言語を奪われるということは、先にも述べた理由から、その民族のアイデンティティの喪失あるいは死を意味する。1979年、ウェールズの民族運動の指導者のひとり、Dr. Davies は、他の仲間と起こしたウェールズ語専門のテレビチャンネルを要求する示威行動のために、翌年、裁判にかけられたが、その裁判での申し立ての中で次の様に述べている。

...the purpose of our action was to show that the pouring of a torrent of English over an extensive region of Wales where the Welsh language is struggling to live — and to do this every day unceasingly and relentlessly — is an act of destructive violence against our language and our heritage and our very existence as a small nation. (中村 敬著、『英語はどんな言語か—英語の社会的特性—』、三省堂、1989年。p.49.)

*下線、筆者。

テレビ電波に境界線はない。不利な状況にもかかわらず、必死で生き延びようとしているウェールズ語を抹殺せんばかりの勢いで、連日テレビから溢れ出る English の奔流は、ウェールズ人から言語を奪い、少数民族としての存続そのものさえ脅かしていると、Dr. Davies は訴える。言語とはただの便利な（あるいは不便な）道具ではない。自国語への執着は、ただの感傷の類ではない。言語と人間存在の関係は、想像以上に本質的なものだ。例えば言葉の不自由な外国人は、周囲の人々から人格や知能まで未熟に見られる可能性があるが、当の本人にとっても、借り物の言葉による外国暮らしは、アイデンティティを内側から狂わせる結果になりかねない。自身の言語を奪われた人は、ちょうど魂を盗まれた人間のように、奇妙な違和感（非現実感）、自己喪失感、あるいは生きながらの死を経験するに違いないのだ。

今日、ウェールズ語存続への意識が高まり、情熱的に擁護が叫ばれている一方で、この言語が置かれている現実は大変厳しい。ある調査によれば、1981年の時点で、ウェールズの総人口に対するウェールズ語人口の割合は、18.9パーセントに過ぎないという。（中村、『英語はどんな言語か』、p.57参照。）トマスの子供時代（1910～20年代）、ウェールズ語はすでに惨めな状況にあった。上記の調査によれば、1801年には80パーセントを占めていたウェールズ語人口も、その後、急速に減少を続けて、1921年にはわずか37.1パーセントにまで落ち込んでしまっていた。その上、都会部では、ウェールズ語を母語とする人口はきわめて希薄であったと考えられる。当時のウェールズにおける一般的な家庭教育は、子供を英語世界（強い言語 English を母語とする世界）の一員として育てることが常識であり、プライドでもあった。トマス自身も Welsh ではなく、English を母語として育った。彼は、その当時の子供にとってのウェールズ語の状況を、エッセイの中で次の様に述べている。

It was also very un-Welsh in accordance with the climate of the day. Once a year on St. David's Day there was a concert, and in the evening a Welsh play, when, to our surprise, we discovered that quite a few of the staff could speak Welsh. The number of Welsh speakers in Wales has declined disastrously since then: and yet there is more Welsh and Welsh history in the schools now. And there are secondary schools where Welsh is the medium of instruction, a thing unheard of, when I was a boy.

('Autobiographical Essay', 2-3.)

学校においてもウェールズ語は教育の対象ではなかった。(今日では事情は変っている。) 成人した彼は、やがてこのことに疑問を覚え始める。幼児、父からウェールズへの夢を呼び覚まされて以来、彼は先祖に対するロマンティックな物語を紡ぎ続けた。彼はウェールズを深く愛していた。それにもかかわらず、詩人として English には誰よりも堪能でも、ウェールズ人であってウェールズ語で詩を書くことが出来ない。故郷への *hiraeth* と相俟って、失われたウェールズ、彼の心の内に棲む「本当のウェールズ」へ帰還すべく、彼の手から失われた言語、Welsh の学習が始まった。トマスが28才の頃である。この決意にいたる経緯を、彼はエッセイの中で次の様に語っている。

1. After being a curate in Chirk, between Wrexham and Oswestry, for four years, I decided to get married. The vicar did not want a married curate. I had therefore to find somewhere else to live. There was a vacant parish in English Maelor at the time, and since it provided a suitable house, there we went, into what might as well have been the English plain – that part of Flintshire which lies between Wrexham and Cheshire. And from there, in the evening I could see the Welsh hills some fifteen miles away in the evening, magical and mysterious as ever. I realised what I had done. My place was not here on this plain amongst these Welsh with English accents and attitudes. I set about learning Welsh, so as to get back to the real Wales of my imagination. I came on slowly, too slowly to be ready for a Welsh parish. ('Y Llwybrau Gynt 2', 138.) *下線、筆者。
2. Many bombs were dropped in the area that night, and the hill-country in the vicinity of Minera was set in fire. On seeing the flames, they started to drop bombs there as well, and a shepherd who lived at the edge of the moorland got the fright of his life. So hateful was it to the curate to think of the destruction occurring almost every night, and such was his *hiraeth* for the hills in the distance (Moel Fama could be seen quite clearly to the north-west), that he

decided to learn Welsh as a means of enabling him to return to the true Wales.
('No-One', 50.)

* 下線、筆者。

1940年、新婚生活の落ち着き先を求めて、Hanmer (Maelor Saesneg) に赴任したトマスは、イングランドとの境に暮らして、自分あまりにも見当違いな場所に来たことに気付く。ウェールズの懐かしい丘陵は、彼の hiraeth を煽りたてるかのように、はるか西方に遠のいてしまった。おまけに、毎晩のように、ナチの爆撃機が頭上を通過するエンジン音を聞き、激しい空襲に驚く。その頃彼は、この地を離れ、今も本当のウェールズが残る場所に帰ることを夢見て、ウェールズ語の学習を決意するわけだが、その心の経緯を述べる語り口は1と2でかなり違っている。'Y Llwybrau Gynt 2' は 'No-One' に20年ばかり先立って公表されたものだが、後者に比べてはるかにロマンチックな語り口になっている。ところで、2の「破壊を嫌って」("So hateful was it...to think of the destruction...")の表現も、彼の *Autobiographical Essay* の同様の箇所を読めば、上品な言い換えに見える。*Autobiographical Essay* (p.9) からは、はっきりと「臆病風に吹かれて」("from a cowardly wish...")、つまり、爆撃に対する恐怖から、この地を離れることを決意したことが読み取れる。同じ出来事を回想するにあたって、その時々本人の心模様が見える様で興味深い。しかし何れにしても、戦争の破壊によるショックは、彼が行動を起こすきっかけにすぎなかったろう。なぜなら、その心理の底には常に hiraeth がどっかりと腰を据えていたのだから。

ところで、当時の言語状況において、この学習の実行にともなう苦勞は並大抵のものではなかった。それでも得意の粘り強さで、トマスは遂にこの言語をマスターする。しかし、教会での説教 (the Church in Wales ではウェールズ語訳の聖書の使用とウェールズ語による礼拝が公認されている)、講演、著作においてこれを自由に使いこなした彼も、結局ウェールズ語で詩を書くことはできなかった。それが詩の言語のもつ特殊性というものだ。

(4) 神の不在

トマスの詩のテーマとして繰り返しあらわれるものに、彼を苦しめる「神の不在感」がある。どう呼びかければ、神は彼に応えてくれるのか。この世の悲惨を訴える彼の声

に、耳を傾けてくれるのか。この世の生命の根源、宇宙創造の原因であり意志でもある神の存在が否定され、ぼやけてしまった現代にあって、実存者の不安は底がしれない。個々の人間存在は他の全ての現象と同様、死とともに跡形も無く崩壊し、塵芥のように忘れられてしまうだけなのか。私たちに与えられているのは、ただ泥沼のような絶望だけなのか。物質至上主義の世界観の中で、自己の存在の原因がただの偶然、誕生は不条理な事件と教えられても納得出来るものではない。神を失くした現代人が立ち向かわねばならないのは、無限に孤独な宇宙だ。そして、帰るところを持たない根無し草あるいは異邦人としての自己認識、決して癒されることのない故郷喪失感だ。そんな所から、数々の悲壮感を漂わせた現代の悲喜劇が生まれる。一方、神を忘れ慢心した物質主義者達が支配する人間社会は、墮落の一途をたどるばかりだ。こうした時代に、トマスは詩人の直観で神の存在の気配を感じながらも、その証拠のはかなさ、不確かさに苛立ち続ける。

(1)

..... He will not any more

to our lure. Why, then, do I kneel still
striking my prayers on a stone
heart? Is it in hope one
of them will ignite yet and throw
on its illumined walls the shadow
of someone greater than I can understand?

('The Empty Church', *Poems of R.S. Thomas*, 122.)

もはや我等の誘いに

神が喜ばれることは無いであろう　なのになぜ、私は跪き
冷たい石の心臓に、祈りを打ちつけ続けるのか
何時かひとつの祈りが火を放ち

照らし出された石壁に
 人知も及ばぬ大いなる者の影を投じる
 奇跡はあるのだろうか

(2)

It is this great absence
 that is like a presence, that compels
 me to address it without hope
 of a reply. It is a room I enter

from which someone has just
 gone, the vestibule for the arrival
 of one who has not yet come.

.....

.....My equations fail
 as my words do. What resource have I
 other than the emptiness without him of my whole
 being, a vacuum he may not abhor?

(*'The Absence'*, *ibid.*, 129.)

この大いなる不在こそ
 神の似姿 真に迫るその力の故に
 応答の希望もなく私は語りかける
 私が訪ねる部屋は

空しく、今居た人の気配を残すのみ
 それとも、まだ来ぬ人を待つ
 控えの間か

.....

言葉は無能、方程式をたてても無駄なこと
 神の居ないこの空しい実存
 この空虚—神はそれがお望みか—
 それだけが私の全て

(3)

Night after night I point my hands
 at the sky, a launching pad
 for my prayers to take off for their orbiting
 in immense space. What listener
 is this, who is always awake
 and says nothing? His breathing
 is the rising and falling of oceans on remote
 stars. The forbidden tree flourishes
 in his garden and he waters it
 with his own blood.

.....
I lift my face
 to a face, its features dissolving
 in the radiation out of a black hole.

(ERS, 39.)

夜毎わたしは天に向かって
 両手をさし向ける 広大な宇宙空間の軌道に
 私の祈りを打ち上げる発射台だ
 私の祈りを聴いているのは誰だ
 常に目覚めながらも沈黙をまもる者

神の息吹きは遠くの星の
大海に波打つ潮の満ち干
神の庭に禁断の木は栄え
神は自らの血をその木に注ぎ育てる

.....
私は神の顔を見上げる
その顔はブラックホールから輝き出る光に
溶けていくのだ

Ⅱ．自然に宿る神

Holyhead で過ごした少年時代、トマスがどれほど自然を満喫したかは、'Y Llwybrau Gynt 2' に生き生きと描き出されている。一面に茂るハリエニシダのトンネルや、遊び仲間の他には人影も無い海の入江で、少年達は想像力にまかせて、思う様冒険を楽しんだ。自然を愛し、スポーツを好み、学校の勉強には熱心ではなかった。これについてトマスは、'No-One' の中で次の様に述べている。

But one must be honest : the boy(=Thomas) had little interest in books. The open air was his main delight, with sport a very close second. ('No-One', 35.)

ともかく戸外で過ごすことが大好きだったと白状している。少年らしく、小鳥の卵にも興味を持ったが、それよりも自然が見せる根源的な美や力に心を奪われた。ワーズワースに共通する精神がそこにはある。この傾向から、トマスはロマンティックな青年に成長していく。大学に入り、ひとり暮らしを始めた彼は、ある夜、こっそりと下宿を抜け出す。ガールフレンドに会いに行くためではなく、月明かりに照らされた野道をさ迷うために。

One moonlight night I slipped out after supper down through the town and out along

a track beside the stream that came from Felin Esgob. The way led beneath the trees. Tawny owls called: the water flashed and rippled under the full moon: a feeling of exhilaration at being out in the country at night, young and free, possessed me. ('Autobiographical Essay', 4.)

満月の白い光にきらめく川のほとりを歩き、暗い木立で啼くモリフクロウの声に耳を傾け、露に湿った草の香りを嗅ぎ、若い彼の心は解放感で満たされるのだ。

前章でも述べたように、聖職者として、一個の人間として、神の不在の感覚に悩まされたトマスではあったが、詩人としては、愛する自然を通して常に神を感じる事が出来た。彼は自分が、ロマン派の詩人、ワーズワースと同じ心を持っていることを知っていた。しかし、自然界に神や聖なる者の宿りを見ることは、詩人としては当然のことで、聖職者の立場にある彼の場合、キリスト教会から異端とみなされかねない。ところが、自然界(大宇宙)の森羅万象を媒介として彼に顕れることを選んだのは、神自身だと、トマスはエッセイの中で述べている。それ故、(神が創造した自然を愛する)詩人の地位に甘んじなければならぬと、彼は言う。

I acknowledge the validity of the mystics' claim to know God immediately: but it would seem that the deity has chosen to mediate himself to me via the world, or even the universe, of nature. I realize, therefore, that, because I have chosen the love of created things, I may not have reached the highest state possible to a human here on earth, but must be content with the fact that that is the sort of poet I am. ('Autobiographical Essay', 19.)

さらに、上記のエッセイの別の箇所、牧師として在任中は、「教会に雇われる身で、聖書についての勝手な見解を説く気はなかった」とも述べている。('Autobiographical Essay' は引退後書かれた。)しかし、聖職者と詩人の立場の間に矛盾は無いかと人に聞かれると、彼はいつも、「キリストは詩人であり、新約聖書は詩だ」と答えた。詩として聖書を説くことに矛盾はないと、彼は考えていた。

As long as I was a priest of the Church, I felt an obligation to try to present the Bible message in a more or less orthodox way. I never felt that I was employed by the Church to preach my own beliefs and doubts and questionings. Some people were curious to know whether I did not feel some conflict between my two vocations. But I always replied that Christ was a poet, that the New Testament was poetry, and that I had no difficulty in preaching the New Testament in its poetic context. (ibid., 17.)

*下線、筆者。

自然界は神の創造物で満ち溢れている。この自然が、教会以上に教会であり ["The woods were holier than a cathedral." (ERS, 26.)]、聖なる神の領域であることは、トマスにとって疑う余地のない事実のようだ。

Myself I need the tall woods,
so church-like, for through their stained
windows and beneath the sound
of the spirit's breathing I concede a world.

(ERS, 27.)

私に必要なものは、教会にも似た
丈高く茂った森だ。そのステンドグラスの窓の向こうに
見えざる霊の息づかいの下に
確かに別の世界があるから。

Ⅲ. 想像力の機能

(1) Abercuawg—言葉の力—

Abercuawg とは何か。それを述べる前に、想像力というものについて考えてみたい。トマスは、エッセイの中で、詩の言葉が持つ力（効用）について次の様に述べている。

The nearest we approach to God, he(=Coleridge) appears to say, is as creative beings. The poet by echoing the primary imagination, recreates. Through his work he forces those who read him to do the same, thus bringing them nearer the primary imagination themselves, and so, in a way, nearer to the actual being of God as displayed in action. So Coleridge in the thirteenth Chapter of his *Biographia Literaria*. Now the power of the imagination is a unifying power, hence the force of metaphor; and the poet is the supreme manipulator of metaphor. ... The world needs the unifying power of the imagination. The two things which give it best are poetry and religion. Science destroys as it gives. ("Introduction to 'The Penguin Book of Religious Verse'", *Selected Prose*, 64.)

我々人間は、創造する者として神に最も近づくことが出来ると、コールリッジは言いたいようだ。詩人は、第一の想像力を再現することで、再創造を行う。詩人はその作品を介して、読者に同様の行為を強いる。こうして、読者自身を第一の想像力のより近くに導き、そうすることで、生きて活動する真実の神により近づけることにもなるのだ。コールリッジは、『文学評伝』の第13章で、こうしたことを述べている。さて、想像力とは統合する力だ。それ故、メタファーの力だ。そして、詩人はメタファーの達人なのだ。... この世界は、想像力による統合力を必要としている。それを首尾よく為し得るものは、詩と宗教だ。科学は、この作用をかたっぱしから破壊する。

ところで、ここに述べられた "the primary imagination" (第一の想像力) を理解するには、コールリッジ自身の言葉が必要であろう。

私は「想像力」(Imagination) を第一と第二とに分けて考える。第一の想像力 [the primary imagination] はあらゆる人間の生きる力であり、またその知覚の一番最初の作働者であると私は主張するが、それはまた、無限の「神」(I AM) における永遠なる創造作用を、有限の心の中で反復するものでもある。第二の想像力は前者のこだまであり、意識的な意志と共存するものであるが、しかしその作用の種類においては第一と同様であって、ただその活動の度合と様式において異なるものとする。それは

再創造するために溶解し、拡大し、拡散し、あるいはこの過程が不可能な場合においても、なお常に理想化と調和統一とに向かって憧れる。すべての客体が（客体として）固定した死物であるのに反して、それはまさに本質的に生きたものである。

（コールリッジ、『文学評伝』、Chap.13, p.194.）

コールリッジの記述を読めば、トマスにはちょっとした誤解があるように思える。トマスは「第一の想像力」を、万物を創造した神の想像力と捉えているようだが、コールリッジ自身はあくまでも人間に属するものと考えている。しかしコールリッジにおいても、それは神の想像力の写しであるわけだから、人間的限界の中ではあるが、ある種の客体（特に言葉）に生命を吹き込むことも可能なのだ。科学がその方法として、あらゆる存在を、物質的特性と構成部分に分解してしまうのに対して、詩はありふれた、手垢のついた言葉にも新しい生命を与え、わくわくするような実体のある世界を、読者に再構築してみせる。これが想像力の機能だ。詩人は直観や洞察を伴う想像力で、見える世界と見えない世界の橋渡しを行い、一見異質で矛盾した事物の共通する本質を見抜くことで和解させ、人々が生きるに値する新たな世界のヴィジョンを提示しようと試みる。そしてこれを可能にするのは、左脳の論理ではなく、右脳の力、トマスが「メタファーの力」（the force of metaphor）と呼ぶものだ。神の想像力の無いところ、万物は存在せず、人間の想像力の無いところ、文化も文明も存在しない。想像力とは創造を実現する力であり、創造物に生命を吹き込むものである。コールリッジの言うように、「それはまさに本質的に生きたもの」に相違ない。

さて、問題を Abercuawg に戻そう。Abercuawg とは何か。それはウェールズの詩人、Llywarch Hen の詩に登場する地名だ。そこは、現代のウェールズのように、どこもかしこも規格化され、電線やコンクリートでがんじがらめにされた世界とは別の、夢のように美しい場所（桃源郷）だと、トマスは言う。

...whatever Abercuawg might be, it is a place of trees and fields and flowers and bright unpolluted streams, where the cuckoos continue to sing. For such a place I am ready to make sacrifices, maybe even to die. ('Abercuawg', *Selected Prose*, 166.)

[大意]

...Abercuawg は、木々と野原と花々と、汚染のない澄んだ川の領域だ。そこではカッコーが、絶え間無く鳴いている。そんな場所のためならば、命を捨てても惜しくない。

トマスは、1976年の the National Eisteddfod で、この地名に因んだ講演を行った。そこで扱われているのは、言葉と存在の関係だ。例えばシェークスピア劇の登場人物を考えただけの場合、ハムレットのように、長く親しまれてきたキャラクターは、実在の人物以上に確かな存在感を持つ可能性がある。私達に特定の言葉あるいは名前は、時に、想像力の中で成長し、完全な形を得て、ひとり歩きを始めることもあるのだ。しかしそれだけではない。言葉は呪文のように、それを意識化し、口にすることで、世界に内在する実体と呼び覚ますことも可能なのだ。

If Wales knows those things which pertain to her peace, Abercuawg may come nearer. . . . Nothing does not exist. And yet one cannot conceive of this nothing. That is the mistake which the brain always makes. People tend to think that original state is a void and that being is something which comes and fills that void. We speak of presence and absence. But we can never become conscious of absence as such only that what we are seeking is not present. Only being is real therefore. "Nothing" cannot be conceived, as I have just said. Try, You cannot. There is always something present. Fall back on language. Call out: NOTHING! It is totally meaningless. But shout: Abercuawg! and the echoes begin to awake. (ibid., 171-172.)

もしもウェールズが、この国の平和にとって相応しい物のことを知っていれば、Abercuawg はより近くなるでしょう。... 無など存在しません。しかも、人は無を思い描くことなど出来ないのです。そんなものは、頭がいつも犯す過ちなのです。原初の状態は虚無であり、存在が生じてその虚無を満たすと、人は考えがちです。しかし我々は、探しているものが見つからない時以外、不在を意識することは出来ません。それ故、存在（有ること）だけが真実なのです。すでに述べたように、「無」など思い描くことは出来ません。やっpegおらんさい。出来ないでしょう。存在だけが常に存在す

るのです。言葉のことに戻りましょう。大声で、NOTHING! と、言ってごらん下さい。何の意味もありません。だけど、Abercuawg! と叫んでごらん下さい。そうすれば、こだまが呼び覚まされるのです。

(2) 詩人の本務

言葉に存在を促す（呼び出す）力があり、想像力が生命を宿すものならば、失われた美しい世界の回復は可能であり、来るべき理想の世界の実現を念じることにも意味がある。その時、人は、今の時間に徒に押し流されることなく、ロマン派の理想主義者、P.B. シェリーのように、理想社会の実現を真剣に思う義務があるのかもしれない。トマスはエッセイの中で次のようなことを述べている。

... if we subscribe to Shelley's description of the poet as the unacknowledged legislator, then it is only by upholding such an ideal in poetry that we can at long last change the people and lead them to their essential dignity. ('Some Contemporary Scottish Writing', *Selected Prose*, 38.)

民衆が変わるのを辛抱強く待ち、人間の尊厳に目覚めさせることが、詩人の使命ならば、それは詩を書く行為の中で実現されなければならないということだ。トマスにこの使命感があったことは確かで、Tony Brown の次の一文がこれを裏書きしている。

As Ned Thomas and Tony Conran in particular have pointed out, R.S. Thomas's view of the poet's social role is rooted in the idealism of the Romantic poets, to whom he frequently alludes in his essays. In the interview which he gave to John Ormond in 1972 he emphasizes the fact that the word "imagination" has for him the meaning which Coleridge gave to it: "the highest means known to the human psyche of getting into contact with the ultimate reality." (Tony Brown, 'On the Screen of Eternity', *Miraculous Simplicity*, 186.)

特に Ned Thomas と Tony Conran が指摘したように、詩人の社会的役割についての

R.S. トマスの見解はロマン派詩人達の理想主義にその根がある。しばしば彼はエッセイの中で、これらの詩人にそれとなく言及している。1972年の John Ormond とのインタビューの中で、彼にとって「想像力」という言葉が意味するものは、コールリッジがそれに与えた意味と同じである、という事実を強調している。すなわち、「究極のリアリティに接触するために、人間の魂が知り得る最上の手段」という意味だ。

詩人の本務は、自らの想像力を駆使して、現象に隠された世界の真実を人々に示し、民衆の霊性を高めることにあり、トマスは考えていた。もちろんこれは、ロマン派の詩人達の信念と共通するものだ。彼は、詩の中でも同様のことを述べている。

But what to do? Doctors in verse
 Being scarce now, most poets
 Are their own patients, compelled to treat
 Themselves first, their complaint being
 Peculiar always. Consider, you,
 Whose rough hands manipulate
 The fine bones of a sick culture,
 What areas of that infirm body
 Depend solely on a poet's cure.
 ('The Cure', *Poems of R.S. Thomas*, 31.)

だが、どうすればよいのだ。医者としての詩人など
 今頃は稀だ。たいていは詩人自身が
 自分の患者で、一番に自分の治療を
 迫られている。そして、彼らの訴えは
 いつも風変わりだ。しっかり考えてみなさい。
 病んだ時代の、華奢な身体を操る
 がさつな手が誰の物かを。
 詩人にしか治療できないのは

その衰弱した身体のどの部分なのかを。

多くの現代詩人は、詩人にしか出来ないはずの本来の役割（使命）を果たせずにいる。彼らはロマン派的精神を時代錯誤と決めつけ、虚無を信奉し、時には、瑣末なあるいはグロテスクな実験に心を奪われたりしている。これは他の芸術にも共通して言えることだろう。

IV. 結論 - R.S. トマスのロマン派的精神

以上に述べてきた内容から、トマスの主張するところを箇条書きにすれば、次のようになるだろう。

1. 現象世界とは別の本質的な実在の世界がある。
2. 宗教と詩は究極においてひとつのものである。
3. 自然界が神の教会であり、森羅万象に神の存在の啓示がある。
4. 詩人の本務は、自らの想像力を駆使して、すべての現象に宿る真実を示し、民衆の靈性を高めることにある。

こう列举してみると、彼はワーズワース、コールリッジ、シェリーといったロマン派の詩人達と同じ精神を持つ、現代詩人であることが分かる。これは必ずしも、時代錯誤を意味することではない。ひとつの時代の中で、人はその時代の主流に目を奪われて、視野狭窄に陥る傾向がある。詩人の世界も同じことだ。現代の詩人は、大宇宙の力を感じずにおおらかさを忘れて、物質的世界観に囚われ、神経症的にちっぽけな自己を思い煩い、様々なイデオロギーを頑なに振りかざそうとする。トマスにしても、そうした人間の習性から完全に解放されているわけではない。

ところで彼の自伝、'No-One' は、次の様な記述で始まる。

Man is a prolific being; he has covered the face of the earth. Why fear barrenness,

then? This very minute women are giving birth in every corner of the world. It was so in Cardiff on 29 March; one birth among thousands. ('No-One', 27.)

人という生き物は多産だ。人類はこの地表を覆い尽くしている。だから、子孫が絶える心配がどこにあらう。この瞬間にも、世界の隅々で女たちは出産を続けている。3月29日のカーディフでもそうだった。それは、数え切れない誕生の中のひとつに過ぎなかった。

淡々と語られる自己の誕生。それは、地球規模で考えれば、毎秒繰り返されるほんのありふれた事件のひとつに過ぎなかったろう。しかしこの子は、間違いなく天才に生まれついていたのだ。それにしても、トマスは何故このような語り口で自伝を始めたのか。自分自身を、「誰でもないもの」、no-one などと呼んでいるのか。これこそが自分自身と確信できるもの、自己の存在のアイデンティティを探し求めたトマスの人生については、既に述べた。だが、自分の真の正体を知っている人間など存在するのか。実際、人間とは哀しい生き物だ。愛や希望を求めながら、絶えず不安に追いたてられ、その足元では、絶望の暗い淵がはっきりと口を開けて、人を待ち受けているのだ。貧困や飢餓、戦争や犯罪から来る苦境に、なす術もなく圧倒されている無数の人々。自分が何者なのかを確かめる暇もないままに、個人の尊厳も意志も押し潰してしまう社会構造・経済構造の中で、マニュアル化された人生を送る現代人。今はあどけない赤子も、やがてはこの巨大な不幸の影に呑みこまれて行く。トマスは愛児の将来を思い、ふと暗い気持ちに捕われるのだ。

Despite the atmosphere of the nursery, that half-light before the fire, cradling the child, telling it stories, wishing it God's blessing in its small cot, dark thoughts come to the priest in the church porch at night, with the owl calling, or later at his bed-side. (ERS, 38.)

子ども部屋のあの空気、暖炉の前のほの明かり。揺りかごを揺すり、お話を聞かせ、小さなベッドで眠るものに神の祝福を祈りながら、なぜか僧侶の心は沈む。梟の

声がする教会の入り口で、深夜の寢床で。

地表を覆い尽くすほど繁殖し、我が物顔にこの地上を闊歩する人類。エゴの欲望を充足させる為には、他の犠牲をも顧みず、環境破壊を繰り返す。地球上のあらゆる場所にべたべたとマーキングを行い、資源を独占して憚らず、ハイテクと称する玩具はやがてゴミの山を築く。それが現代文明だ。どれほど物質を操り、物質に依存し執着しても、心の空虚は埋まらない。人間は鳥達に見習うべきだと、トマスは言う。

Wales today is a land of pylons and wires, ... a land of new roads full of visitors rushing to the sea, where the planted forests and the caravan parks are fast swallowing the remaining open ground. In the face of all this, R.S. well knew why he had become more and more interested in birds. Since the spirit of the countryside had weakened, since its beauty was being destroyed by modern developments, one of the few pleasures remaining there was to see some of the creatures still going about their traditional business. Birds existed millions of years before the advent of man. They are beautiful and full of life, and have adapted perfectly to their own needs. Man has for ages yearned to be able to fly, and at last he has succeeded at the expense of exhausting the earth of its resources and polluting it, and of filling the sky with unbearable tumult. Twice a year millions of birds rise into the air without much noise, without any harmful effect on the environment, to winter in warmer countries for a few months and to return in the spring to raise a new family. ('No-One', 99-100.)

今日のウェールズは鉄塔と電線の国、... 海へと詰めかける観光客で一杯の新しい道路の国だ。そこでは人工的に植樹された森と、キャラバンパーク(トレーラーハウスキャンプ場)が、残された空き地を急速に呑み込んでいく。こうした事実を前に、R.S.(トマス自身のこと)には、彼がますます野鳥に心を惹かれるようになった理由がよく分かっていた。野(自然)はすでに力を奪われ、その美も開発により破壊されていくばかりであったから、古くからの営みに生きている生物のどれかを観察することは、そこに残された数少ない楽しみのひとつであった。鳥は人類が出現する前から、何百

万年も生きて来ていた。鳥達は美しく、生命力にあふれていて、必要に応じた完璧な形を獲得していた。人類は長年、飛行に憧れてきた。そして、地球資源の枯渇と公害と空を揺るがす耐えがたい騒音を代価に、遂にそれに成功した。年に2回、何百万という鳥達が、たいした騒音もなく、環境も破壊せずに空の旅に出る。冬の数ヵ月を、温暖な地で過ごし、春には子育てに戻って来るために。

人が発明した飛行機は、爆音と排気ガスを撒き散らしながら、空を騒がせている。鳥は遙かな昔から、ジェットには及びもつかない高度な技術で、この空を飛び続けてきた。泥足で自然界を踏みにじることもなく、他の生命を犠牲にすることもなく、自然のリズムを掻き乱すこともなしに。結局、自らの才能に慢心した人類は暴走して、この地上に、物質だけのグロテスクな帝国を築き上げた。なぜ私たちはここにいるのか。神の本意はどこにあるのか。この世界のあるべき姿はいかなるものか。その答は私たち自身の心の中にある。心の内の真実の声に耳を塞いだまま、この時代の苦境を逃れることは不可能であろう。現象世界に心を奪われず、エゴの欲望に押し流されることなく、内なる声に耳を傾ける意志、本質を掘り起こす希望、それこそが真の想像力であろう。R.S. トマスが現代に鳴らし続けるのは、こうしたロマン派的警鐘なのだ。

[使用文献]

- (1) Thomas, R.S., *Autobiographies* (ed. & tr. from the Welsh by Jason Walford Davies), J.M. Dent, London, 1997.
- (2) Thomas, R.S., *The Echoes Return Slow*, Macmillan, London, 1988. (published in paperback, 1989.)
- (3) Thomas, R.S., *Selected Prose* (ed. by Sandra Anstey), Poetry Wales Press, Mid Glamorgan, 1986.
- (4) Thomas, R.S., *Poems of R.S. Thomas*, The University of Arkansas Press, Fayetteville, 1985.
- (5) Davis, William V. (ed.), *Miraculous Simplicity*, The University of Arkansas Press, Fayetteville, 1993.
- (6) コウルリッジ、サミュエル・テイラー；『文学評伝』（桂田利吉訳）、法政大学出版局（り

ぶりあ選書)、1976年。

(7) 敬、中村、『英語はどんな言語か—英語の社会的特性—』、三省堂、1989年。

[R.S.トマスが辿ったウェールズの道] (R.S. Thomas, *Autobiographies*, xxxvi-vii. より必要部分のみ転載)

